

説教題：「陽を吸う」

聖書箇所：マタイによる福音書 5章 43 節— 48 節

5：43 「あなたがたも聞いているとおりに、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。

：44 しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

：45 あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。 :46 自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。徴税人でも、同じことをしているではないか。 :47 自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるのか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。 5:48 だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

イエス・キリストは太陽に思いをはせよと言っておくのです。創造の神秘に思いをはせよと仰るのです。私は山頭火にならって、「陽を吸う」ところまで行きたいと思えます。

ここでイエス・キリストは「あなたがたも聞いているとおりに、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている」と仰っています。しかし、イエス・キリストのお言葉ではございますが、さすがに聖書のどこを見ても「敵を憎め」という言葉は出てきません。敵に対する憎しみについては、たとえば詩編 139 編の 21 節、 22 節にあります。こうです。

「主よ、あなたを憎む者をわたしも憎み / あなたに立ち向かう者を忌むべきものとし / 激しい憎しみをもって彼らを憎み / 彼らをわたしの敵とします。」

しかし、「敵を憎め」という命令形はありません。ただ、ユダヤの隣人愛は結局のところ同胞愛であって、隣人なるユダヤ人以外の敵は憎めといわれているのだとイエス・キリストがお考えになったということは考えられます。本日は、この前提で話を進めます。

さて、イエス・キリストは敵を愛せよと仰います。敵は愛せないから敵なのであって、愛せたら敵ではありません。ところで、敵という英語は enemy です。その enemy の語源であるラテン語は inimicus です。Inimicus は in という前綴りと amicus という名詞でできた言葉です。そして amicus という名詞は「友人」を意味します。この語源から考えると、敵とは友人でない人です。

では、人はどのようにして友人同士になるのでしょうか。それは自然に仲良くなるのでしよう。俗に馬が合うとか申します。「馬が合う」というのは、乗馬に由来する言葉だそうです。乗馬では馬と乗り手の息が合わなければ乗り手は落馬することになります。それで、馬と乗り手の呼吸がぴったり合っていることを「馬が合う」といったのだそうです。こちらではそんなに意識していなくても、相手の人が自分に反感を持っているのがわかることがよくあります。そのように気付いた場合、確かにこちらもその相手と馬が合わないことに気付きます。その人は、とてもじゃないが友人にはならず、こうして私たちの前に敵が立ち現れてまいります。その敵を、イエス・キリストは愛せよ、と仰います。どうしたら、敵を愛することができるのでしょうか。たしかに、乗馬の譬で行くなら、敵が敵のままにいるなら、私たちはこの人生で落馬して、大怪我をしたり、死んだりしてしまいます。だから、何とかして敵を愛さなければなりません。どうしたらいいのでしょうか。

そこで 45 節のイエス・キリストの言葉に注目したいと思います。こう仰っていました。「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる

からである。」

私はこの言葉を読んで、太陽の存在に今更の如く気付かされます。敵を憎んでいるとき、私は天を見上げることなく、太陽の存在を忘れてしまっていました。アンパンマンのやなせたかしが作った歌にこういうのがあります。「手のひらを太陽に」という歌です。こうです。

1. ぼくらはみんな生きている 生きているから歌うんだ
ぼくらはみんな生きている 生きているから悲しいんだ
手のひらを太陽に すかしてみれば
まっかに流れる 僕の血潮
ミズだっておけらだっ あめんぼだっ
みんなみんな 生きているんだ 友達なんだ
2. ぼくらはみんな生きている 生きているから笑うんだ
ぼくらはみんな生きている 生きているから嬉しいんだ
手のひらを太陽に すかしてみれば
まっかに流れる 僕の血潮
とんぼだっかえるだっ みつぼちだっ
みんなみんな 生きているんだ 友達なんだ

おけらが、みみずに向かって、お前は生き物ではない、なんて言うとは考えられません。おけらもミズもあめんぼもトンボもミツバチも、お互いにいがみ合うことなく「みんなみんな生きているんだ、友達なんだ」です。この歌を私は大学の聖書概論の授業で歌ったことがあります。それを聴いたある学生は、中学校へ教育実習に行き道徳の時間に歌って喜ばれたと言っていました。

私たちは太陽を見上げるとき、おけらやミズやあめんぼうやトンボやミツバチになったように思えるのではないのでしょうか。その時、私たちはあの馬の合わない敵と一緒に太陽を浴びながら愛し合うという道に、自分のほうから第一歩を踏み出せるのではないのでしょうか。

おけらやミズやあめんぼうやトンボやミツバチを思うだけで不十分なら、私は梅干になりたいと思います。私が福岡女学院に赴任したのはもう 20 年近く前のことです。その頃、女学院の短期大学には生活学科というものがありませんでした。確か 7 月の下旬、すなわち今頃だったと思いますが、生活学科の教室の前の校庭に台が置かれて、その上にざるに平たく盛られた梅が干されていました。しそを入れて干す赤梅干しでした。それを見た途端に、私は大好きな自由律俳人種田山頭火の俳句を思い出したのです。その俳句こそ、他にもない、「陽を吸う」という句でした。山頭火は、どんどんそぎ落としていった人生の歩みの極みで、ついに太陽を丸ごと吸っている自分を実感したのでしょうか。私はそれ以前にも、この句を気に入っていたのですが、だからこそこの句をその時思い出したのですが、この句の本当のエネルギーが、その時、干されている梅干を見たとき、一気に了解されました。実に、忘れられない体験でした。あの梅干たちは、しっかりと陽を吸っていました。

私は思います。馬の合わない敵同士の私たちが、一緒にあの梅干のように陽を吸うなら、愛し合う可能性が出てくるのではないかと。こう考えると、太陽を指し示してくださったイエス・キリストに感謝せずにはいられません。

信仰とは、「陽を吸う」ことではないでしょうか。イエス様は「陽を吸」えと仰っていると言っても言い過ぎではないでしょう。「陽を吸う」なら、敵も味方もありません。イエス様に太陽を指し示して頂いて、もし私達に「陽を吸う」というごとき感動が無いならば、積極的な信仰が起こってこようはずがありません。そして、「陽を吸う」ごとき心のうち震えるような喜びのうちに「敵を愛す」ということができないならば、「敵を愛しなさい」と仰るイエス様のご命令は、私たちにあって、単なる重荷でしかありません。その時、私達にとって宗教も信仰も重荷となります。教会での奉仕や、いや礼拝出席さえも重荷となります。何十周年記念事業も修養会も重荷となります。

いやいやながら教会生活をする必要はありません。そこから脱出できるかどうかは、本日の場合、イエス様の仰ることを聴いて、「陽を吸う」かどうかにかかっているでしょう。そして「陽を吸う」とは、実は「イエス・キリストを吸う」ということです。そうであるなら、どんないやなことも、死さえも、喜んで受け容れる者となりうるでしょう。死という憎き敵さえも、愛し得るようになるでしょう。それが信仰者の生き方でしょう。敢えて言うなら、そのような気持を起こさせないような教会の営みは間違っているでしょう。この世的な喜びを第一義としているような信徒は、イエス・キリストを吸うていないのです。しかし、「陽を吸う」ようにイエス・キリストを吸えるかどうか、神の賜物に属する事柄です。神様、イエス・キリストを吸わせてくださいと祈るしかないでしょう。

祈り 神様、私達が深呼吸してイエス・キリストを、魂の奥深く吸い込むことができるように、導いてください。この祈り、主イエス・キリストの御名によって御前にお捧げいたします。アーメン。